

疎開者たちの沖縄：大城立裕「望郷」の後景

花田，俊典
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/16000>

出版情報：花田俊典教授著作集. 5, pp.139-148, 2001-03-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



疎開者たちの沖縄

——大城立裕「望郷」の後景——

花田俊典

沖縄人連盟Ⅱ「自由沖縄」

比嘉春潮は大正十二年に上京して改造社や小山書店で編集者をつとめ、また伊波普猷や柳田國男に師事して沖縄学に多くの業績を残した人物だが、彼の『沖縄の歲月——自伝的回想から』（中公新書、昭44・3）によると、敗戦直後の十月、沖縄出身の本土出稼労働者たちの無産運動のリーダーとして大正末から昭和戦前・戦中の時代を挺身的に生き抜いてきた松本三益がやってきて、伊波普猷を会長に立てて民主的な組織としての沖縄人連盟をつくろうと持ちかけたという。「われわれが連盟を作る目的は、本土在住の沖縄出身者が郷里にいる現存者と連絡をとること、至急に通信交換および金銭や救済物資の送付をできるようにすること、沖縄戦の実相を知ることの三つが主であった」。

そのころ疎開者が学童疎開をふくめ、九州に四万六百余人もいた。また南方からの引揚民や復員兵士も続々ふえ、本土にいるのが全部で五万人に達するといわれていた。そして困ったことに、戦争中は義務と心得ていた疎開先の受け入れ側も、復員者はふえる、引揚者もやってくるで、喜ばれない客になってしまっていた。困窮するこういった人びとを救済しなければならないというので沖縄協会はいろいろやっていったようだ。資料を見ると、福岡県庁内に沖縄の残存県庁があり、北栄造内政部長がいたが、氏は沖縄協会九州支部長を兼務し、戦災援護会を活用して、疎開者や引揚者援護にあたっていたらしい。

ここに「沖縄協会」とあるのは「財団法人沖縄協会」のこと。前身は戦争末期に結成された「報国沖縄協会」。比嘉春潮の紹介する同会の「規約」によると、「皇国護持の大精神に基づき沖縄県人の決死結集を図り、その総力を挙げて大東亜聖戦の完勝に捧げ、軍官当局に協力し、急速なる郷土奪還を期するとともに、県人の文化的、経済的、社会的発展向上を促進する」というもので、理事長は伊江朝助男爵（貴族院議員）、事務所は東京・丸ビル内にあった沖縄県東京事務所。規約文面から推測し

て、六月二十三日の沖縄陥落後に「郷土奪還」を合言葉として戦災による疎開者・孤児・学童らの援護にあたらうとした組織のようで、この報国沖縄協会が敗戦後の十月一日、「報国沖縄協会の幹部と同じ顔ぶれにより」（比嘉春潮）、財団法人沖縄協会に移行した。一方、これとは別に、こうして伊波普猷を会長とする比嘉春潮らの沖縄人連盟ができて、二つの組織は並立することになった。「要するに協会は官庁の援護の下に本土在住者の援護に当たり、連盟は本土在住の沖縄人の民主組織によつて、沖縄人の要求を表示し、本土在住者の救済と同時に協会のふれ得ない復興沖縄の民主化促進をはじめ、基本的な問題にも積極的に取りくんで運動していくというわけだった」（比嘉春潮）。

沖縄人連盟は昭和二十年十一月十一日正午、丸ビル六階の沖縄県事務所を発起人らによる準備会兼創立大会を開催し、ついで十二月九日午後五時より、神田教育会館で引揚民救済沖縄県人大会を開催。約一千名ほどが参加したといい、マッカーサー司令部に対する郷里帰還促進決議を採択するなどして閉会した。この大会において総務委員は伊波普猷、大浜信泉、比屋根安定、永丘智太郎、比嘉春潮、幹事は仲原善徳、山城善光、松本三益ほか五名に正式決定。大会席上で伊波普猷主席総務委員は、「無暴な戦争で国民が或はたはれ傷き家は焼かれ食糧難に悩まされてゐる。特に我が沖縄本島は殆ど灰燼に帰しわれら親兄弟は今どうして暮らしてゐるかその安否さへ確かめることは出来ない。更に九州に避難した疎開者や学童の身を思ふとき一体この責任は誰が負ふのだといひたくなる。（略）聯盟はかゝる実状を広く国民に訴へ積極的救援策を促すと共に沖縄本島との通信連絡、帰郷出郷の自由をマクアーサー司令部に請願し更に実現の暁には民主主義による沖縄再建設に貢献することを目的として結成された次第である」（「自由沖縄」2）と挨拶した。

この直前の十二月六日付で、ガリ版刷り（第六号から活字印刷に移行）の機関紙「自由沖縄」を創刊。編輯発行人は比嘉春潮（東京都杉並区西田町一ノ五六六）。きたる九日の大会の参会呼びかけ文につづき、「沖縄人聯盟創立経緯」「関西沖縄人聯盟創立さる」「九州聯合県人会成立」「沖縄協会の概貌」「沖縄県庁は何をしてゐるか 北内政部長の語る施政方針」「聯盟と沖縄協会の関係」「九州避難民の窮状」「福岡に於けるダバオ避難民」といった見出し記事を掲載している。

翌二十一年六月二十五日付で、この「自由沖縄」の九州版第一号が発

刊されている。発行所は沖繩人聯盟九州本部（熊本市紺屋町二ノ三七）、
発行人は大嶺政和。第十・十一合併号（昭21・9・15）まで確認できる。

第一号の記事によると、「全九州沖繩人大会」はさる五月二十六日午後
二時より熊本市五福国民学校講堂を会場に、熊本・宮崎・鹿児島・北九
州各県人団体代表と一千余名の同胞を集めて開催。「自由沖繩」九州版
第一号掲載の設立趣意書には以下のとおり述べられている。

全九州在住沖繩人諸君

軍閥官僚政府の惹起した無暴な侵略戦争によつて我々の郷土沖繩は
最大の犠牲に供せられた。

美しい緑の郷土は空爆と艦砲によつて荒廃に帰し沖繩本島はもとよ
り太平洋の各地に活躍多年に亘り築かれた我々の同胞の生活は一挙
に破壊せられ、悲惨なる境涯に投げ込まれた。沖繩決戦を前に彼等
は作戦上の必要を理由として九州各地に老幼女子を幾万となく強制
疎開せしめその生活を保証すると確言したにも拘らず顧みない。敗
戦とともに九州にある疎開同胞五万の生活は日一日と急迫し生活物
資の窮乏とインフレの増昂により愈々飢餓のどん底に彷徨せしめら
れてをり、孤児となつた三千五百の疎開学童は衣食に窮し骨肉の温
愛に飢えて放置されたまゝである。又外地引揚同胞は幾多の苦難と
栄養失調のため死者続出の状態であり、徴用の男女工員復員者は失
業の嵐に曝れ学徒青少年「は」生活苦のため学業を放棄するの已むな
きに至つてゐる。かゝる実状に対して政府官僚は拱手傍観責任を回
避し一月二日附聯合軍司令部による窮乏せる沖繩人の生活を保障す
べしとの指令を何等実行せず寧ろこれを封殺し去らんとして居る。

我々は九州在住沖繩同胞の危機に対し蹶起して政府の責任を追及す
るとともに聯合軍司令部指令の即時実行を要求しなければならな
い。（後略）

連合国最高司令官総司令部は昭和二十一年一月二十九日付の覚書で、
「日本の範圍に含まれる地域」を、「日本の主要島嶼（北海道、本州、
四国、九州）と対馬諸島北緯三十度以北の琉球（南西）諸島（口之島を除く）
を含む約一千の隣接小島嶼」と正式に定めたが、これ以前からも沖繩と
の自由な往来は許されていなかった。「自由沖繩」第一号（昭20・12・
6）は、「沖繩は朝鮮台湾等と同様外国として取扱はれてゐるので注意
すべきである」とよびかけている。戦争末期、沖繩決戦をひかえて国策

に依じて「本土」に疎開した沖繩の人たちの帰郷の途は断たれた。
「自由沖繩」九州版の第一号にはまた、沖繩口を用いた「沖繩同胞に
贈るメッセージ」が掲載されている。

沖繩や大和の無理な戦引起ちやる為に浅ましい形になやびたん。

あの様な難からも凌ぎみしよわち、国元なかい残いみしよわちやる
御惣様や沖繩建直しの為に心勇さで色々きばてうたびみせうんりち
聞ち、心から有難く感じたうやびん。くまなかい居る、わつたう沖
繩建直しの此の大事業んかい御惣様の御まじよん肝心打ち合ち働方の
ならぬなまの立場御託の仕様もねうやびらん。戦世も終とうやびう
くと、一日も早く戻て御惣様拝むし願ねがひしやうやびん。

大和のなまの有様や敗戦さる為に色々様々の事起りて、食物も衣裳
著はらも不自由しやうやびうしが、吾々疎開者が先づ命めいにかゝ
る迄やあびらん元あたる沖繩の色々の事、思出しゆる度に御惣様と
御行逢する事の一日も早くなゆし御願しうり楽しみに命じやうやび
ん。

疎開者の心持うんぬきて御惣様の頑丈みしよわち働方みせうること
御願し御挨拶に替へやびん。

全九州沖繩人大会の名に於て

一九四六年五月二十六日

沖繩民政府御中

沖繩人聯盟九州本部

沖繩協会Ⅱ「沖繩新民報」

「自由沖繩」第一号に「福岡に於けるダバオ引揚民」と題する記事が
ある（末尾の括弧弧囲み署名は徳田安周とある）。これによると、昭和二
十年十月二十三日、ダバオより八七一名（うち六割は沖繩出身者）が宇品
港に上陸し、二十六日午前一時、博多駅に下車。事前に連絡がなかった
ため大博劇場（記事本文には「大博多劇場」とあるが大博劇場が正しい）
に仮収容し、その後、福岡市厚生局の手配により市内の国民学校二校に
収容。同月二十七日、ダバオより千七百名が宇品港に上陸したあと、二
十九日午前一時、博多駅に下車し、市内の各国民学校に分宿した。寝具
は沖繩県事務所より各一枚宛を支給したが、衣服の給与はなく、食事は
一般配給に依存しているものの副食物は入手困難。「殆んど全部が栄養

失調とマラリヤ患者で收容以来現在までの死亡者八十名である。福岡市内東住吉、高安、東光国民学校を觀たが引揚民は何れも講堂の板の間に車座になつて宿泊してをり、不潔で一步室内に入るとムツと異臭が鼻を衝く、死亡者の屍体は隔離室に菰を被せて安置してあるが、火葬場との連絡悪しく三日も放つたらかした儘である。

福岡市の博多港は全国有数の引揚げ港の一つだった。「ふくおか半世紀」戦後・引き揚げの記憶（「西日本新聞」平7・8・2—5）によると、終戦時点の海外在住日本人の総数は推定で約七百万。引揚げ者数のもっとも多いの港は、佐世保港の約一三九万六千人、ついで博多港の一三九万二千人、舞鶴港の六六万四千人、以下、浦賀港、仙崎港（山口県）、大竹港（広島県）、鹿児島港、函館港、名古屋港とつづく。宇品港に着いたダバオからの引揚者たちがなぜ福岡市に移送されたのかはわからないが、福岡市内には沖縄県事務所が置かれ、ここが敗戦直後は沖縄県庁機能を代行していたので——正確にいうと政府は昭和二十年九月二十日付で福岡市の沖縄県事務所を九州総監府に移行し、副参事官が沖縄県内政部長を兼務し、沖縄県知事の事務を代行した——、これとの関係から引揚者たちは福岡市内に移送されたのかもしれない。

昭和二十一年一月二十五日、福岡市内で旬刊（月三回刊）の新聞「沖縄新民報」が創刊された。発行兼編輯人は「親泊政光」（親泊政博）。発行所は沖縄新民報社（福岡市天神町岩田屋三階）。創刊号の社告に「本紙は沖縄県民の機関紙として創刊しましたその後の沖縄と引揚県民の在り方につき毎号重要記事を掲載します」とある。

編輯兼発行人の親泊政博は明治三十一年四月十八日、沖縄県首里崎山村（現・那覇市）の生まれ。新崎盛暉「廃墟のふるさとを想う人びと」（『縮刷版沖縄新民報』解説）などによると、彼は戦時下の新聞一県一紙時代の「沖縄新民報」の業務局長（のち取締役）をつとめた人物。新聞発行の資材購入のため上京し、福岡市内で敗戦を迎えたという。そのまま沖縄へ帰れないでいたところ、北栄造沖縄県内政部長（ちなみに新崎盛暉によると一九四六年一月の地方官制改正によって「内政部」は「内務部」に改められたので、これ以降は「内政部長」）の要請を受け、県の援助による半官半民の疎開者向け新聞「沖縄新民報」を発行した。北栄造は財団法人沖縄協会九州総支部長も兼務していたから、この「沖縄新民報」は報国沖縄協会—財団法人沖縄協会系の新聞ということになる。つまり、

敗戦後の九州には、さきの比嘉春潮や松本三益らの「民主組織」（比嘉春潮）である沖縄人連盟系の「自由沖縄」九州版（熊本市）と、半官半民の沖縄協会系の「沖縄新民報」という、二つの系統の新聞が発行されていたわけだ。

「沖縄新民報」の発行所が置かれた「岩田屋」は福岡市内の老舗デパート。戦時下にはこのデパートの食堂で檀一雄が律子と結婚式を挙げている（「リツ子・その愛」）。『岩田屋経営史』（株式会社岩田屋、昭42・12）によると、岩田屋の前身は宝暦四（二七五四）年創業の岩田屋呉服店。当初は舞鶴城お堀前の大工町にあったが、明治になって支店の博多岩田屋呉服店が規模拡大し、昭和十年、本家岩田屋とも合併して百貨店企業として岩田屋株式会社（岩田屋デパート）が誕生した。売上は順調に伸びたが、昭和十七年十月、政府は日本百貨店組合に対して、百貨店の売場の一部（規模に応じて一割五分から三割まで）を官庁および戦時緊急産業関係に供出するよう要請し、全国の百貨店と同様に岩田屋の場合は二割五分を供出。昭和十八年三月二日にまず食糧営団の事務所が移ってきたというから、これは敗戦後もしばらく継続されたようだ。当初は福岡県庁舎内にあったという沖縄県事務所も、この当時は岩田屋三階に移転していたので、こういう関係から半官半民の沖縄新民報社もこの一面に編集事務所を置いたのであったろう。高崎正毅「限りなき前進を——中牟田喜一郎聞書」（西日本新聞社、昭62・10）によると、岩田屋ビルは昭和二十年六月十九日夜間の福岡大空襲では焼失をまぬかれたが、黒の迷彩をほどこした社屋は戦災のすすで汚れ、敗戦直後は「百貨店とは名ばかり。営業していたのは地下一階と一階の一部だけ。実態は配給所同然で、二階から上には福岡商工局、福岡石炭局、石油配給公団福岡地方局、農林省福岡食糧事務所、福岡県価格査定委員会などが入り、役所というか雑居ビルというか、活気はどこにもない」状況だったという。二十一年六月には米軍司令部から社屋ビル四—六階の接收通知もきたが、これは奔走して何とか回避したらしい。

「沖縄新民報」第一号のトップ記事は「沖縄本島への帰還 当分許可せぬ 調査団派遣も マ司令部から指令」。記事本文には「北内政部長は目下要務打合せのため滞京中であるが、引揚げ県民の沖縄本島への帰還について陳情したところ軍事的理由により当分許可せず、また調査派遣も許可しない旨、マツクアーサー司令部から正式に指令があつた」と

書き起こしている。「北内政部長」の最近の動向から好意的に紹介するあたり、たしかに官庁の広報紙の性格をおびている。

同紙第三号(昭21・2・25)の「人の動き」欄には、沖縄出身の詩人の伊波南哲の消息が報告されている。

△詩人伊波南哲氏は、戦災援護会や日本児童文化協会とタイアップし大分県重岡、川原木、上野の三ヶ所に疎開している県人児童を慰問激励し多大な感銘を与へた、住所は小倉市南下富野町二四六ついで第七号(昭21・4・15)の紙面には、「北九州日鉄を中心とする県人二千人に依つて組織された沖縄聯盟北九州支部は三月下旬結成され会長には、伊波南哲氏が選任された」との記事も見える。この「沖縄聯盟北九州支部」は「沖縄人聯盟北九州支部」の誤植だろう。同紙の「人の動き」欄には「永丘智太郎氏(沖縄人聯盟副会長)は北九州における県人会発会式に出席し、廿七日福岡の沖縄県事務所を訪問した」との記事がある。永丘智太郎は明治二十四年、那覇生まれの社会運動家。雑誌「改造」記者となり、第一次共産党の中央委員もつとめた。戦後は沖縄協会の常務理事をつとめ、また比嘉春潮らの沖縄人聯盟結成の話を聞きつけて自分も加えてほしいと申し入れてきた人物。

伊波南哲は明治三十五年九月八日、沖縄県八重山郡石垣村(現・石垣市)の生まれ。大正十二年、東京の近衛歩兵連隊に入隊し、二年後に除隊したが、ふたたび上京して警視庁に奉職。また佐藤惣之助の主宰する詩誌「詩之家」に参加。『南島の情熱—伊波南哲の人と文学』(伊波南哲詩碑建立期成会、昭53・2)巻末の年譜によると昭和二十年の項には、「三月十日の東京大空襲で文士勤労隊は自然解散。東京は危険に曝されたため五月小倉市の実弟興輝を頼って移転、下富野に居を定める。家財は、五月二十五日の空襲により、新宿貨物駅で焼失。／六月、西部軍報道部の報道部員として徴集され、火野葦平ら九州文学同人と共に福岡市に常駐。火野葦平『革命前後』に詳しく書かれている。／八月、終戦で報道部は解散、小倉市に帰る。疲労が重なり一カ月病床に就く。／十月、沖縄の疎開児童慰問のため、久留島武彦、坪田譲治、加太こうじらと宮崎、大分、熊本などの各地を回る童話行脚に参加する。／十二月、沖縄人聯盟北九州地区の会長に推薦される。／この年、八重山で両親死去」とあり、翌二十一年九月、引揚げ船で郷里の石垣島に戻った。ちなみに小さな注記をしておくと、西部軍管区報道部は昭和二十年七月七日の発

足だから、彼が白紙徴用されたのは六月ではなく七月のはずだが、あるいは徴用通知は六月中に受け取ったのかもしれない。また、さきの新聞記事に伊波南哲の住所が「小倉市南下富野町」とあつたが、この「南」は不要だ(「下富野町」は現在は「北九州市小倉北区下富野」)。

疎開児童慰問

さきの『南島の情熱—伊波南哲の人と文学』には原田種夫も一文(「福岡時代の伊波南哲」)を寄せている。彼は伊波南哲と同じく「九州文学」同人で、西部軍報道部でも一緒だった。彼の戦後の小説「ふるさと」の歌(『九州小説選』第一輯、九州書房、昭21・6)は、水俣在住の詩人の淵上喬(毛銭)を訪ねたあと、「沖縄の優秀な詩人、与那輝秀」に会うため、バスに三十分ほど乗って熊本県南部の「湯の出」まで出かける話である。「湯の出」は水俣川上流の湯出川の溪谷に沿った葦北郡湯出のこと、現在水俣市湯出で、湯の鶴温泉と称する温泉郷がある。小説では、この地の古びた旅館「鶴泉寮」に沖縄からの疎開児童が九十一名暮らしており、その引率の教師として旧知の与那輝秀が来ているのだった。旧交をあたため、二人して子どもたちを眺めていると突然、「雪がふる。うむさん。うむさん。」と子どもたちの狂喜する声が聞こえてきた。すると、他の子どもたちも縁側に飛び出して、空から降ってくる雪を小さい両手で懸命に受けとめている。「ああ、雪、雪、雪がふる、うむさん、うむさん。」

『天からの慰問が降りて来ましたね。』

与那は黙つてうなづいた。一年ぢゆう雪といふものを見ない常夏の国の子供たちに、雪はたしかに天の奇蹟にちがひないのだ。彼等の歓喜の中にひそかに芽ぐむ切ない望郷の思ひをさぐらうとするのは、あるひは私の感傷であるかも知れない。大人の智慧が探り得ない世界に、子供は子供独特の美しい夢の世界に生きてゐるのであらう。子供たちの歓喜する姿を眺めてゐた詩人、与那の眼は、思ひなしか光つてゐたやうに思はれる。彼はつづけさまにコップを空にした。そして、また、きつちり膝をそろへ、膝の上に両手を行儀よく置いたかと思ふと、彼は眼をとどて、ごく低い声で歌ひだした。

旅や浜やどい
草の葉と枕

ねてん忘らりぬ
わやのウすば

旅は浜宿り、草の葉が枕、寝ても忘れられぬ、親のお傍、という意味であらう。

原田種夫がじつさいに湯出の沖縄疎開児童を訪ねていることは、彼の日記（志村有弘編『九州文壇日記』、叢文社、平3・2）の昭和二十一年十二月二十二日の項に、「二・三〇―湯の出着／田浦屋一泊／鴨泉寮まで沖縄の子供らについて、引率の先生と対談。／一枚ばかり書いてやめる。／この宿はうるさい川の音。」と見えることによつて知れる。小説中の「引率の先生」与那輝秀は知友の伊波南哲をモデルにしているが、もとより伊波南哲がじつさいの引率教師だったわけではない。

沖縄学童の九州疎開については琉球新報編集局学童疎開取材班『沖縄・学童たちの疎開』（琉球新報社、一九九五・五）がその概略と当事者たちの回想をレポートしている。これによると沖縄から本土への学童疎開は昭和十九年七月七日、政府の緊急閣議で決定され、沖縄決戦の円滑な遂行のため、本土へ八万人、台湾へ二万人、計十万人の学童を疎開させる計画だった。同年八月十二日に第一陣が出発し、以後、八月二十二日出発の疎開船対馬丸がアメリカ潜水艦の魚雷で沈没する事故があったりしたが、九月二十日までに総計六五六五人が九州に到着し、宮崎・熊本・大分の三県に分散配置された。

沖縄からの疎開児童第一陣の計二一九名が教師七十九名に引率されて熊本県に入ったのは八月三十一日のこと。疎開先は山鹿・内牧（阿蘇町）・日奈久（八代市）・湯出（水俣市）などの温泉地であった（『明治・大正・昭和の郷土史43 熊本県』昌平社出版、一九八二・九）。後続組も県内各地に分宿したが、疎開生活は苦しく、波野村では電灯も飲み水もない校舎で合宿生活を送り、寒さと飢えに苦しんだという。昭和二十一年十月十日、佐世保に集合して帰郷した（『新・熊本の歴史10 年表編』熊本日日新聞社、昭58・8）。

小倉市（現・北九州市）在住の阿南哲朗は、市内の津遊園にながく勤務し、また大分県玖珠町出身の童話作家の久留島武彦——彼は明治三十年代の後半、子どもに読み聞かせる口演童話運動を巖谷小波らと提唱し、日本のアンデルセンとよばれた——に師事して、詩集や童謡民謡集や童話集を残した文化人だが、彼もまた、終戦後は戦災援護局の委嘱を

受けて、「私たちの班は久留島武彦先生のお話と、佐々木すぐる先生（月の砂漠の作曲者）の歌の指導、それに私の絵話を組み合わせ、大分、熊本両県の疎開地を巡回した」（「あれから二十年、あの子らは」、「阿南哲朗遺稿集 わらべうた」北九州市・あらき書店、一九九二・八）という。その彼が戦後まもなく、「熊本県のある疎開地で童話をしたときに、私たちへのお礼にと、女の先生の伴奏で、沖縄の歌『ふるさと』というのを、こども達が教室の教壇の上に並んで唄ってくれた」（「戦争中九州に集団疎開した沖縄の子こども達を想う」、同前）ことがあり、この歌詞を女先生から書いてもらったという。全三番の歌詞がすべて紹介されているが、いまその三番だけを引いておこう。

どんとふんだよ 故里の土

黄なユ―ナーの花が散る

散った井戸端に 衣洗う

母は笑顔で 迎えたよ

老いの瞳が 光ってた

海の彼方に 夕日が赤い

夕日が赤い

このとき、「十五、六人のこどもたちは、この歌を合唱しているうちに、ふるさとの父母を思い出したのか、黒い大きな瞳に涙があふれてしまいは声が出ないほど泣きながら歌った。オルガンをひいていた女の先生も鍵盤の上に涙をボト、ボトと落してひきつづけた……」という。「久留島先生も、佐々木先生も貰い泣きをした。戦争が終って、平和になつて一日も早くこのこども達が、沖縄に帰れるようにと私たちは祈りに祈った。昭和二十年十月のある日の遠い思い出のことである」（同）。さきの伊波南哲もこの阿南哲朗も、ともに当時は小倉市内に住まい、二十年十月に久留島武彦らと一緒に各地の学童疎開地に慰問に行つたというのだが、この二人がお互いに面識があつたかどうか、また慰問の際に同じグループになつたかどうかはわからない。

望郷1

沖縄県那覇市在住の大城立裕は大正十四年九月十九日、中頭郡中城村の生まれ。彼の自筆の「年譜（試案）」（『青い海』69、昭52・12）および自伝『光源を求めて——戦後五〇年と私』（沖縄タイムス社、一九七七

・七)によれば、彼は昭和十八年、沖縄県立第二中学を卒業し、沖縄県派遣学生として東亜同文書院に入学するため、いったん東京に集合したのち長崎から船で上海に渡った。在学中は徴用で「軍米収買」に携わり、また楊州に五ヵ月間滞在して反共情報工作の一環として敵側の新聞・冊子を翻訳する仕事に従事したという。昭和二十年三月、召集を受け、蘇州に赴いて独立歩兵第一一三大隊に現地入隊。同文書院出身の兵隊たちは中国語ができたので謀略宣伝ビラを書かされたりしたという。八月十五日、敗戦。同月二十六日、現地除隊となり、上海に戻って、軍需品接収の通訳として働いた。昭和二十一年二月、依願退職し、四月、帰国。姉の夏が子どもたちを連れて熊本県阿蘇郡宮地町(現・一の宮町)に疎開していることを知らされていたので、同地に身を寄せた。

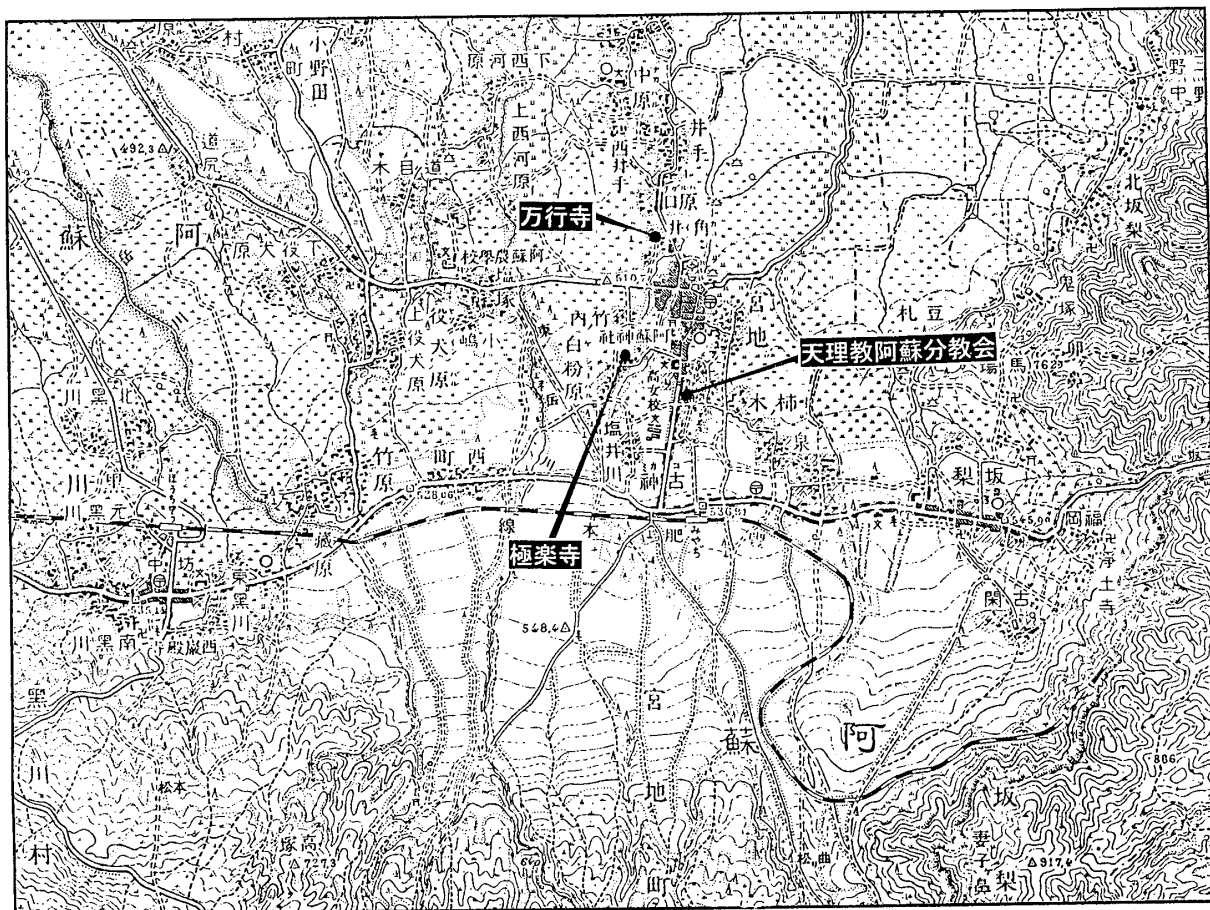
「縁側が東にむいていて、軒先に柿の木があった。もう四月で実はなつていず、若葉をつけた小枝のむこう五キロほど先に、阿蘇山の内輪山がそびえて、黒い煙をあげていた。／＼熊本県阿蘇郡宮地町(現在一の宮町)の極楽寺といった」と彼は『光源を求めて―戦後五〇年と私』に書いている。ちなみに、阿蘇山は陥没火山なので広大な外周をなしている外輪山があつて、その内側の平野部に阿蘇五岳がならんでいる(「内輪山」という言い方はない)。噴煙をあげているのは活火山の中岳のことである。「宮地の町に沖縄の疎開児童が幾人いたか知らないが、みんなしごとく生きていた。二つのお寺と一つの天理教会に、プライバシー無視のごろ寝で住んでいた。そこへ夫が復員してくれば、別に一軒かまえる、という風であつた。農家の手伝いをして、その日に食べるだけの米をもらつたりした」。

ここにいる「宮地の町」にあつた「二つのお寺と一つの天理教会」とは、彼が姉たちと住んだ極楽寺と、万行寺、それと天理教阿蘇分教会のことだ、これらは現在も同地にある。ちなみに阿蘇町は昭和二十九年四月一日付で隣接三村と合併し、「一の宮町」になった(旧宮地町地区は現在は大字宮地)。

この疎開体験について大城立裕は後年、長文のエッセイ「沖縄で日本人になること―こころの自伝風」に(『同化と異化のはざま』潮出版社、一九七二・六)のなかでもふりかえっている。彼はそこで、沖縄人の疎開者たちの複雑でいささか屈折した心情について言及している。

寄留民だという肩身のせまさと、戦争のぎせいになった沖縄の人

「五万分の一地形図大分十五号 阿蘇山」(地理調査所、昭21・10)宮地町付近



間であつて好きこのんでこんなところに暮らしているのではないのだ、とふんぞりかえつていふような態度とが、疎開者たちの内面に雑居していた。土地のひとからは、親切と差別と、いろいろな扱いがあつたようだ。私の住んでいる土地では聞かなかつたが、他の土地の疎開学童たちが、土地の子供たちから、「沖縄人がスパイをしたから戦争に負けたのだ」といじめられた、という話も聞いた。そういう差別のかたわらで、たとえば私のいた町のある寺では、そこにいた疎開者たちはおおむね低い階層のひとが集まつていたようだが、本堂の畳を二年のうちに表か裏か判じかねるほどぼろぼろにし、赤ん坊の小便を存分にしみこませ、それでいて和尚や家族から一言の苦情もなく、そのまま沖縄へ帰つてしまつた、ということもあつた。

大城立裕がここでこだわっているのは「寄留民」という弱い立場からくるコンプレックスと、ただ被害者意識を反転させただけの権利意識^{II}ふてぶてしい開き直りとの無自覚的な混在である。「低い階層のひと」とか、彼らが本堂を汚したまま平然と帰郷したとかは、どうでもいいことだ。社会階層の上下とマナーの有無とは対応関係にはなからう。そうしたことは聞き流しておけばいい、こういうエピソードをとおして彼が語っていることの核心の狙いは、いわゆる沖縄人一般にほぼ共通している、劣等意識を被害者的特権意識でおおいかくすような心理構造のいびつさなのだ（——もつとも、こういう心理構造は「沖縄人」にかぎるわけではなく、もつと一般的に、つまり「日本人」にも「欧米人」にも「インド人」にも……ひとしく見られる傾向でもあるが）。

くわえて、ここには沖縄という地域の歴史的な被差別意識も絡んでいることを大城立裕は見逃さない。彼の『光源を求めて』における回想に戻れば、「疎開者は闇商売をして生活をするほかはない」ので、「汽車のなかはそのような人で一杯であつた」が、「そのような風景のなかで、声高に沖縄方言が聞かれた。それが私にはショックであつた」。

戦時中は方言そのものが差別材料であつたから、戦争に負けて汽車のなかでも方言がまかり通つたということは、その人たちが解放感に酔つていたということに他ならないのだろう。

敗戦と同時に、沖縄の人たちは沖縄に帰れなくなつたし、だいいち沖縄は米軍に占領されてしまつて、そのままアメリカ力になつてし

まうのか、という思いさえしたことがある。

この不安感を打ち消そうとするときに、自分たちは並みの日本人ではないのだということを、自信に切り換えようとする倒錯が生じることがあり得るはずである。それが、汽車のなかでの声高なウチナーグチであつたと思われる。劣等感を優越感にすりかえる風景であつたと、私は思っている。

大城立裕が方言に対して敏感なセンサーをもっていることは、彼がしばしば自身の小説に沖縄方言を忠実に取り込もうと試み、あるいはまた、幼少時代に徹底的な標準語励行をしいられた体験をくり返し言及していることによつても知ることができる。あるいは、これは沖縄に生まれ育ち、「沖縄口」を身につけた人が、「日本語」で表現しようとする際にひとしく敏感にならざるをえないセンサーともいえようし、さらには生活言語としての話し言葉から書き言葉へシフトする際の共通した問題意識といつてみることもできる。ただし、にもかかわらず沖縄の場合は「沖縄口」（といつても多様な形態があるが）と「日本語」との較差が大きいことからくる困難があつたろう。「私は一九三二（昭和七）年に小学校の一年生になつたのだが、それから一九四三年に旧制中学を卒業するまで、一日として誇張ではない！『標準語励行』の枷を忘れたことはない。教師たちのエネルギーの半分は、おそらくこの標準語励行のためにささげられたのではないだろうか」（『沖縄ナシヨナリズム』、『内なる沖縄——その心と文化』読売新聞社、一九七二・五）。

「劣等感を優越感にすりかえる風景」（『光源を求めて』）は、熊本市内の闇市での利権獲得にも見られた。

熊本市内の闇市場では、沖縄県人が幅をきかせている（敗戦直後の極度の物資不足に対応して統制経済体制が布かれたなかで、闇物資を商う市場は違法社会だが、沖縄人はその特殊事情のゆえに、大目に見られ、彼ら自身がそれぞれに甘えて無頼な生活を送ることもあつた）、と聞いたが私は行つてみたことはない。話に聞いただけの材料で、後年（一九四七年）に「望郷」という戯曲を書いた。

望郷の思いは疎開者たちの生活の主調音であつた。

彼の自筆年譜によると熊本時代の大城立裕は、復員後の五月にマラリヤを発病し、六月には満州から兄が宮地に引揚げてきた。彼は姉を手伝つて熊本で米を仕入れて福岡に売りに行く仕事をやったこともあつた

が、大半は姉に寄食する「浪人」生活だったという。

半年ほどたった九月頃、沖縄の父親からハガキが届き、父母の無事を知った。折から沖縄への帰郷が許されるようになっていたので、同年十一月末、熊本をたつて佐世保の「収容所」(引揚援護局―東彼杵郡江上村)に向かい、そこに一週間いたあと、引揚船で沖縄へ戻ったという。

「沖縄新民報」および「自由沖縄」を見ていくと、「帰るか、残留かの調査 三月十八日一斉に実施 洩れなく登録しよう」(「沖縄新民報」4、昭21・3・5)、「沖縄への帰還 近く許可か」(同17、昭21・7・25)、「沖縄への帰還愈々実現 帰還希望者は聯盟に連絡せよ 混乱を防ぎ秩序整然帰らう」(「自由沖縄」9、昭21・8・15)、「颱風と闘いつつ 第一陣晴の船出 希望を満載して一路南へ」(「沖縄新民報」19、昭21・8・25)といった記事がある。これによると引揚げは昭和二十一年八月十五日から十二月中までに実施。九州在住疎開者は鹿児島港および佐世保港から乗船し、八重山への引揚げ者は鹿児島港から、宮古への引揚げ者は名古屋港から乗船する規則になっていた。帰郷の第一陣はそれぞれ鹿児島港・宇品港・佐世保港から出発する予定だったが、予定通り出発したのは鹿児島港だけで、残り二つは悪天候のため延期となっている。

望郷2

大城立裕らに乗せた引揚船は那覇港に着いた。「甲板から那覇市内を見た印象が鮮烈であった。市内一面しらけた平面であった。一〇・一〇空襲後と戦争後とで、どの程度に変わったものかは分からないが、ここにコンクリートの建物がわずかに残っているだけで、あとは隆起珊瑚礁の表皮が剥がれて白くなつたものと分かった。ノ埠頭にはアメリカ兵がカービン銃を肩にかけて、男性たちに使役を命じていた。引揚げ荷物を自分たちで荷揚げするのであった」(『光源を求めて』)。

就職先は容易に見つからなかったが、翌二十二年なんとか琉球列島米穀生産土地開発庁(通称・開拓庁)に就職することができた。「戦中世代としての挫折感から執筆を思いたち、戯曲『明雲』を書きはじめ、途中で沖縄民政府文化部芸術課(課長、川平朝申氏)の脚本懸賞募集に応じ、当選(七月ごろ)」(自筆年譜)した。この戯曲『明雲』は、「そこでは適当な生産を行い、子孫を根絶やさず、大地に深く根をおろし、耕作を続

けよう」といった向日的・生産的な内容であったといい、「これほど希望にみちた言葉は、沖縄の近代史をかけて見たことがないようなものだ」が、「すべてを失ったことの悲哀を、そのような私たちでも代償しなければならぬ、ということであつたかもしれない」、と彼は『光源を求めて―戦後五〇年と私』で回顧している。「『祖国』を失い、生きる拠り所を失った『民族』の希望は、その『孤独』のイメージを『独立』のイメージに変えることでしかなかった。／これは『沖縄独立論』の育つ基盤であつたといつてよいが、それがいつのまにか消えて、『祖国復帰』に傾いたのは、奇妙な趣であつた」。

この年、彼はついで戯曲『望郷』を執筆している(自筆年譜)。そして昭和二十三年五月、大城立裕は野嵩高校の国語教師となり、戯曲『或日の祭温』を執筆し、折から公募された沖縄教育連合会懸賞募集に応募して一等当選。翌二十四年、コザ地区教育連合会脚本募集に『望郷』で応募し、これも一等当選した。いずれも「明雲」同様、「まったく新劇風」(『光源を求めて』)の作品である。

戯曲『望郷』の舞台は、一九四六年初秋の夜の十一時すぎ、熊本市内の闇市場界隈。舞台中央寄りに屋台店が一つあり、「沖縄人」の若い清子(二十二歳)が愁い顔で人待つふぜい。舞台左端には「内地人」の孤児の啓太郎(十三歳)がごろ寝している。開幕と同時にナレーションが入る。「戦に敗れて一年、こゝ九州の一角熊本市内闇市場界隈有為転変の浮世の波にもまれつくして明日知らぬ命を思ふ由もなく、ただめまぐるしいその日その日の生活戦線に喘ぐ人達の姿を一場に集めて、地獄と極楽、欣楽と悲哀の巷をさまよう世相のあわれさよ、(略)」

舞台花道から「沖縄人」の浩吉(二十五歳)と三郎(二十歳)の二人が無頼漢の風体で登場し、「もうそろそろ秋だ今頃は沖縄へ着いた連中もいるだろうなあ……畜生つ何てこいうに寂しいんだろう」、「兄貴、元氣を出さなきや駄目だぜ——おっあんな所にまだ誰かいるぜ うどんでも何でもいいから一杯腹を作ろうよ」、などと会話しながら屋台をのぞくと、旧知の清子がいた。清子は弟がラバウルから復員して熊本にいてという噂をきいて東京からここに来てさがしているといい、浩吉たちも東京から熊本に流れてきたのだつたが、どうやら清子に惹かれてあとを追ってきたのであるらしい。しめつぱい雰囲気なかで、ふと浩吉がひとりごちる。

「家があつたらなあ、たとい家は焼けても屋敷はなくなつても、ふるさといふものがあつたら、生きてさえおれば必ずそこへ歸つて来るに違いないんだ。たゞ俺達だけは、故郷がないばかりに、あつちをふらつき、こつちにさまよい、いつの日に落着くことがあるのやら、買出、闇商売、喧嘩、みんなつまらねえことばかりだ。家さえありや、こんな苦勞は——いや苦勞はしたつて、明日への苦勞はある苦なんだ」。

しかし浩吉は一方で、「だけど清ちゃん、俺達はまだ本当に希望を失つたわけではないんだ。故郷へ歸るまではな。所があれを見てごらん（下手にねている孤児を指さす）あれこそ夢も希望もない。可哀想に小学校を出るか出ない中にひとりぼっちだ。あの子供達に友情があるかどうか分らない。しかし生まれ故郷にいらあんな生活をしなければならぬなんて故郷の値打があるだろうか。清ちゃん、俺たちはまだ幸福なんだぜ。少なくとも沖繩にいつかは歸れる。それだけで結構なんだ。それだけで大きな希望ぢやないかい」と口にする。故郷がないことを恨みながら、いつかは歸る故郷があることに、希望をつないでいる。

「あちらこちらで内地人だの、朝鮮人だのといざござがあ」つて、時々喧嘩もするという浩吉は、清子から「今までお互いに仲よくやつて来た者どうしが、戦争に負けたばかりに……情なくつて」とたしなめられて、こう返答する。

「ひがみさ、沖繩人だつて、朝鮮人だつて、内地人だつてひがんでるんだ。みんな希望を失つた連中のひがみなんだ。異民族との戦争がすんだと思つたら、今度は同じ民族同志の喧嘩だ。之がいつまで続くか分らない。俺も復員して直きは、やけくそになつて面白半分に喧嘩もしたが近頃はだんく自分ながら浅ましくなつて来たよ。」沖繩人コンプレックスを内側からするどく指摘していく後年の大城立裕の面目が、ここにはすでに發揮されているよう。「故郷がない家がないということもみんな言訳だ」と浩吉は語る。「俺達は、いつかは沖繩へ歸るんだ。家も誰れもいなくなつてみんなの友達と一緒にやつていくんだ」。

キー・ワードは「友達」、すなわち連帯、あるいは親和といつてよからう。だから、彼らはこのあと、空襲で死んだ姉の夢を見て泣き出した孤児の啓太郎に近寄り、「俺達とこ行こうよ、ね啓ちゃん、良い友達

さえおれば、ちつとも淋しいことなんかないんだ」とやさしい声をかける。「そうだ、みんな友達だぜ、家はなくなつて啓ちゃん、熊本の人だろ？ 親兄弟はいなくなつて友達同志で助け合つてさ、ね」。

舞台では、遠くで喧嘩の音が聞こえ、やがて「朝鮮人」の「朝」が血の滴る腕をおさえて走り込んでくる。「朝鮮人同志の喧嘩だ、あの野郎、同じ国でありながら……あいて……、——どうやら「南」と「北」とのあいだで、その片方に「内地人」が入つて、はげしく争つてゐるらしい。浩吉が独白する、「国にも歸らないで、よその国でいがみ合つてゐるんだ。独立したのといつたつて可哀想な国だ。／健二！ 三郎！ 俺達は沖繩に歸つたら、水いらすずで働けるんだ、親兄弟はいなくなつて友達がいるんだ。みんな仲よくやつて行くんだ」。

かくて舞台上ではみんなが浩吉に寄り添い、どこからともなく「椰子の実」の歌声が聞こえてきて、だんだん合唱の声高くなり、しずかに幕となる。合唱「思ひやる八重の潮を／いづれの日にか国に歸らむ」

沖繩で日本人になること

「私の世代にとつて、やはり祖国というものは、生きるための支柱であつた」のに、「青春の夢をたくした同文書院はつづれ、大陸ではたらくという志もつづれ、祖国に歸つてきたら、沖繩の人間として『祖国』はなくなつていた」と大城立裕はエッセイ「沖繩で日本人になること」に書いている。「これは打撃であつた。世間をみまわしても混沌としていた。これからどう生きようか、と考えると、ますます分からなくなつた」と。そこでまず、戯曲「明雲」を書き、「とにかく生産にはげむほかないではないか」というメッセージをこめたといい、そして二作目の「望郷」については、こうコメントしている。

第二作も戯曲である。「望郷」（一九四八）と題する一幕で、熊本の闇市場をあつかつた。ウチナンチュとヤマトンチュの対立をえがいたのではなく、デスベレートになつた青年たちと、つましく屋台店を営む娘との交情を描き、そこへ喧嘩で傷ついた朝鮮人なども出て、「とにかく沖繩へ歸れば、希望が待っているのだ」と叫ぶところ幕になる。

戦後いち早く、朝鮮半島では同胞が南北に分かれて対立をはじめていた。それを思うと、われわれ沖繩人はまだ幸せだ、という風

に書いた。祖国に住んでいて祖国をもたない、その不安定な精神をたてなおすには、郷里沖縄へ帰って祖国からいよいよ遠ざかることよって可能だ、という逆説がそこにはあつて、主題としては一面、前作『明雲』よりさきに出るべきであつたと、いえるかも知れない。

大城立裕は正直である。「われわれ沖縄人」は「朝鮮半島」の不幸に較べれば「まだ幸せだ」、と。これと同じパターンは「望郷」ではさらに孤児の日本人少年の扱いについても指摘することができよう。さきにも引いた一節なのだが、すなわち「しかし生まれ故郷にいながらあんな生活をしなければならいなんて故郷の値打ちがあるだろうか。清ちゃん、俺たちはまだ幸福なんだけ。少なくとも沖縄にいつかは帰れる」、と。敗戦当時、日本国内の「朝鮮人」は約二百万人。当座は帰国者が続出したが、翌二十一年には半島の経済事情の悪化と持ち帰り金の制限のため帰国後の生活に目途が立たず、多くの人たちが滞留をしいられた。

しかし大城立裕は他人の不幸にたつてみずからの幸福をかみしめているのではなからう。エッセイ「沖縄で日本人になること」にはまた、熊本―博多間を走る買出し列車のなかで声高に沖縄方言が聞かれたことに言及し、「臆面もなくウチナー口でしゃべりまくっていた」沖縄人を見て「他の乗客たちには、かれらを朝鮮人だと思ふひとが多かつたようだ」が、さて、「そう思われていることを知つたら、かれらは怒つたろうか」と問うている。

戦前は「チヨウセンとリュウキュウおことわり」という言葉があつたというが、戦後この二つは別の新しい意味でまた結びついたようであつた。戦前におけるこの二者の同義性が「差別」による「被害者」だということだつたとすれば、戦後のそれは、その差別から「解放」されて「独立」した者、ということにならうか。しかし、沖縄人のばあい、それだけでもなく、アメリカ占領下の日本において、自分たちの郷土・沖縄は、アメリカの直接統治下にあつて、日本と対等にある、あるいは日本よりエライ、という奇妙な錯覚がなかつたろうか。(略)やはり当時、熊本市内二本木の闇市場での営業場所の権利をめぐつて、沖縄人と土地のヤクザとのあいだに大喧嘩があつたという。

彼がこだわるのはこの「奇妙な錯覚」である。この「錯覚」はコンプレックスを裏返しただけの優越意識に由来している。これでは健全で骨

太なアイデンティティは育成されない。卑屈な劣等意識が裏返されると、根柢のない傲慢で皮相な優越意識となつてあらわれる。この優越意識は危うく、しかも脆い。

このエッセイを書くのに「なにしろ勇気が必要とした」、と彼はエッセイ集『同化と異化のはざま』の「はしがき」に書きしるしている。

ここには日本人として育ってきた私個人の羞じらいがある。このような羞じらいは、沖縄のほとんどの人があからさまに伝えることをためらつてきたものであり、そのためらい自体がまた、沖縄の歴史の秘密にかかわつたものであつた。山之口貌はそれを詩的表現に託したが、私はここに露骨な散文の告白とした。一九六九年――おそらく沖縄の人間として最初の試みであり、おそきに失したものであろうか。なにしろ勇気が必要とした。敗戦から二十四年、復帰までわずかに三年という時点での懺悔録のようなものだ。

ところで戯曲「望郷」の浩吉は、「俺達は、いつかは沖縄へ帰るんだ。家も誰れもいなくなつてみんなの友達と一緒にやつていくんだ」と明るく語つていた。これをしかし大城立裕は疎開先の熊本で書いたわけではなく、すでに「沖縄へ帰」つたあとに書いている。

そこには「友達」の連帯があつたろうか。昭和二十四年、大城立裕は勤務先の高校の学芸会でこの「望郷」と、あとひとつ石坂洋二郎の「青い山脈」との二つを脚色演出して上演したというが、これを観客の高校生たちはどう見たのだろう。

おそらく帰る場所など、あらかじめはありはしない。いったいそれは、帰りたいと願う意思によつて向こう側に幻視されてくる場所にほかならない。そうだとすれば、わたしたちはついに帰りつくことなどないはずだろう。大城立裕がはざまでいい、また求めでというのも、このことを意味している。

〔付記〕

1 「沖縄新民報」「自由沖縄」は『縮刷版 沖縄新民報 付録自由沖縄』(不二出版、二〇〇〇・四)によつた。

2 大城立裕「望郷」は、大城氏ご自身にお願いしてコピーを送つていただいた。また、旧宮地町の寺院名等については一の宮町の Web サイトを通じてご教示いただいた。ともに、あつくお礼を申し上げます。